

國學院大學學術情報リポジトリ

コメント

| | |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀧澤, 克彦 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/0002001050 |



社会心理的なものと災害

滝澤克彦

長崎大学の滝澤と申します。宜しくお願い致します。

昨年、シンポジウムでご報告させていただきました。國學院大學研究開発推進センターで編集・刊行されました『共存学ブックレット2 復興・伝統文化・ネットワーク―東日本大震災から七年目の今―』にその記録を掲載していただいています。

私は災害研究者ではなく、宗教社会学が専門で、モンゴルの社会主義体制が崩壊した後の宗教復興とその中でキリスト教がどのように広がってきたのかを研究しています。そのような私が震災関連に携わるようになった理由は、東日本大震災発生当時、東北大学に所属しており、フィールドワーカーだったということ、いくらかのご縁があって、東北大学東北アジア研究センターが行った「東日本大

震災に伴う被災した無形民俗文化財調査」に参加させていただいたことにあります。そして、その後も断続的にはありますが、災害研究に関わらせていただいています。

また私は、神戸で十五年、宮城で十五年と生活してきましたので、震災・地震にはなぜか縁があります。平成二十六（二〇一四）年から長崎に住んでおりますが、赴任した当時、「神戸でも地震が起きたし、東北でも地震が起きたから、長崎にも絶対地震が起きますよ」という話をしたら、多くの人に「いや、長崎は地震が起きない所なんです」と言われました。しかし、長崎ではありませんでしたが、熊本で実際に地震が起きました。もちろん、長崎でも今後大きな地震が起きないという保証はまったくありません。現実に、長崎市が面する橘湾には活断層群が通つています。

一つ、このエピソードを起点に問題を提起させていただきたいと思えます。それは、人は、なぜ「地震は起きない」と思ってしまうのかということです。日本全国各地で巨大な地震が起きてもおかしくないというのが、この国の一つの特徴だと思えます。そう考えると、東日本大震災は、日本に住んでいるほとんどの人にとって身近な問題であるにもかかわらず、なぜそう思ったがらないのか、というのがまず大きな問題です。

私は、東日本大震災が起きた当日、出張中でイギリスにいましたので、大きな揺れは経験しておりません。イギリスから帰国する時に仙台空港が機能していなかったため、羽田空港、伊丹空港、山形空港を経由し、そこからバスに乗って仙台へ帰りました。その途中の大阪とある家電量販店に入ったところ、懐中電灯や電池をはじめ防災用品が軒並み消えていました。それは、おそらく、皆が買い漁ったために無くなったのだと思います。阪神大震災から十六年しか経過していないにもかかわらず、震災のことはほとんど忘れられてしまっていることを実感しました。

これは、「覚えていなきゃいけない」「忘れては駄目だ」という倫理的な話というよりは、社会心理的な問題として

捉えるべきだと思います。人は、なぜ忘れようとするのか。おそらく、そこには意味があるはずで、最近では「正常性バイアス」という言葉もたびたび耳にするようになりましたが、人は常に不安を抱えたまま生き続けることはできないということかと思っています。

特にこの心理的側面を防災との関連で考えていくときには、社会的レベルと心理的レベルの問題を慎重に考え合わせる必要があると思います。そこには、単に防災とコミュニティの関係だけではなく、アイデンティティや自分の存在そのものについての不安といったものも関わってくるからです。

例えば、東日本大震災以降、「絆」や「コミュニティ」という言葉が非常に強く叫ばれる一方で、日本全体で、マインオリティに対する非常に偏った見方の排外主義が非常に強まっています。実は、この両者はまったく無関係のものではないのではないかもしれません。つまり、震災というトラウマをきっかけに生まれた、日常や「当たり前」が壊れてしまうことに対する不安と、そのような不安を覆い隠してくれる一体感（「聖なる天蓋」と呼んでもよいかもしれません）、そしてそのような安心に水を差す存在への恐怖、これらの要因は複雑に絡み合っているように思えます。このような社会心理的側面も視野に入れることで、震災に関する議論も、単なる教訓や倫理の話で終わるのではなく、もう一段深いレベルで議論できるようになるのではないかと思っています。

災害文化が背負わされたもの

もう一つ別の問題として、このような議論を行う時に、ストラテジーとして語る場合と、学術的なレベルで語る場合とで分けて考えたほうがいいのではないかと最近では考えるようになりました。行政や社会に対しては、コミュニティや文化の価値、社会的意義を必要以上に強く訴えていく必要があると思います。ただし、それを強調しすぎ

ると、実態とかなりズレてくる部分があります。例えば、「災害文化」といった言葉を通してコミュニティ的なものの意義を強調することは、グレイインフラを推し進めようとする行政に対するアンチテーゼとしてはある程度の意味を持っていると思いますが、一方で、そのような文化やコミュニティといったものを、はたして意図的に作り出しているものなのかどうか、という部分については、私たちは冷静に議論していくべきでしょう。

震災後、災害文化というのは私たちの分野の研究では、非常に強調されてきた問題です。そのような文化を防災あるいは災害に対するレジリエンスに関わるものとして、評価していけるのではないかとこの関心からです。しかし、伝統的な社会のレジリエンスに関わる「災害文化」というものがあるとすれば、それは、百年、二百年、あるいは何百年といった非常に長い年月をかけて、非意図的な形で作り上げられてきたものだと思います。それは、おそらく、度重なる災害をくぐり抜けるなかで鍛え上げられ、残ってきた結果として、レジリエントなものとなったのです。つまり、文化的な適応によるものであり、設計図にもとづき意図的に作り上げられたようなものではないはずです。

現在、私たちが論じようとしている問題は、そのような時間をかけて自然と作られていく形の文化をどうするかという話ではなく、現代という一つの状況、世界の中で、そういう文化をどのように守っていく（あるいは、作り出していく）かという課題になっているのです。「災害文化」とは、本来、災害後の社会を回復させる力（レジリエンス）をもともと備えたものとしてあるはずのものです。しかし、いま議論されているような「災害文化」は逆に我々が守ってあげなければならないものになってしまっているのです。当然ながら、この点に無自覚であれば、すでに脆弱なものとしてある文化あるいはコミュニティに過剰な価値や意義を押し付けていくような事態になりかねません。そして、そのような事態はすでに生じつつあるでしょう。

地域と個人との葛藤の中における災害文化

次に、「地域」という問題について考えたいと思います。地域の問題には、常に個人と社会との葛藤がつきまといませんが、現代の個人化が進んだ社会においては、それはますます大きな課題となつていきます。そのような状況の中で、個人が地域文化の災害に対する耐性の有無にどれほど従属している（あるいは、従属しなければならない）のかを考へることは重要です。

ある意味、個人が地域から独立して自立しているほど、地域のレジリエンスの程度に依存せず、自らの知識と判断に基づいて災害に対する対処のしかたを選択できるという可能性もあるでしょう。災害文化やレジリエンスという問題を考える時に地域社会と個人の葛藤について考慮しなければならぬのは、このような意味においてです。「災害文化」や「絆」といったものを強調しすぎることは、地域から独立し、地域文化にとらわれない（場合によってはそれに異を唱えかねない）ような個人の排除と背中合わせであることに気をつけなければなりません。この問題が、先ほど社会心理的な問題としてお話したことに関連していることにお気付きになられたでしょうか。

災害文化という言葉は両刃の剣になりうるといふ話もありました。それについては、例えば、南三陸町志津川の防災庁舎の目の前にはチリ地震津波が二メートル到達したことを標した碑が建っていました。この碑があったから、職員の方々が防災庁舎に留まったという可能性もあるでしょう。また、岩沼市では金華山（宮城県牡鹿半島沖の島）に対する信仰について耳にしたことがあります。それは「金華山に守られているから、津波が来ない」という伝承でした。文化は常に両義的な側面を持っています。他方で、先ほどお話したように、個人は地域文化から自由になれる側面を持っています。どちらがよいという話ではなくて、その葛藤の中で災害文化を捉えていく必要性があるのでは

ないかということですが。

以上、災害に対する社会心理的な側面、「災害文化」が背負わされた過剰な価値と意義、地域と個人の葛藤における災害文化という三つの問題について、主にコメントいたしました。

ありがとうございました。